「主体的・対話的で深い学び」を実現する音楽の授業づくり

学籍番号　２０９３５１
氏　　名　北村　優佳
主指導教員　田中　龍三

１．研究の概要

１．１　研究の目的

本教育実践研究の目的は、生徒が音楽の授業に主体的に取り組み、対話を通して互いに自分の思いや考えを伝え合いながら学びを深め、思いや意図をもって音楽表現できる授業の構成や教師の手立てを導き出すことである。

１．２　研究の背景

学校における音楽科教育の今日的課題として、学習指導要領に示された「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）が挙げられる。筆者は教職大学院へ進学する前の一年間、公立中学校にて音楽科教員として勤務し、表現領域の歌唱、器楽、創作の分野、及び鑑賞領域の授業においてアクティブ・ラーニングを取り入れようと試みたが、特に歌唱の授業では、楽譜に書かれている音楽記号や曲の背景を説明しながら発声方法などを伝えることに精一杯で、“どのように歌いたいのか”、また“どのように表現したいのか”という生徒たちの思いを上手く引き出すことができず、自身の音楽の授業を改善したいと思っていた。また、学校の環境や地域の実情、生徒の様子はさまざまであるが、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、どのように授業を工夫すれば良いのかを導き出すことは私の最も興味深い課題であり、研究したいと考えた。

１．３　研究の方法

研究は、以下のような方法で進める。

①本論の目的にある「主体的・対話的で深い学び」の意味について、学習指導要領に基づいて整理する。

②実習校における授業の中で、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けてどのように授業が工夫されているのか、また生徒の様子を観察し、レディネスを考慮し、把握する。

③生徒の様子やレディネスをもとに、授業を構想し、実践する。

④「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の３つの視点から授業を振り返り検討を重ね、それらをもとに新たな授業を行い、生徒が音楽の授業に主体的に取り組み、対話を通して互いに自分の思いや考えを伝え合いながら学びを深め、思いや意図をもって音楽表現できるようになるための授業の構成や教師の手立てを導き出す。

１．４　実践内容

・基本学校実習Ⅰ（授業観察、生徒の実態把握）
・基本学校実習Ⅱ（歌唱「夢みたものは」の授業実践）
・発展課題実習Ⅰ（歌唱「アイーダ」の授業実践）
・発展課題実習Ⅱ（歌唱「Caro mio ben」の研究授業）

研究授業では、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指し、生徒がイメージを基に考えた表現を、より歌唱表現につなげていくためにはどうすればよいのかを考え、生徒が音楽の作られ方などに気付き、音楽の見方・考え方を働かせるための効果的な教師の手立てを探ることを目的とした。

また、生徒が対話による自己の考えの変化を具体的に書くことができるようなワークシートについて検討を重ねた。

２．研究の結論と今後の課題

２．１　研究の結論

歌詞の内容と強弱の働きとの関係を学ぶ授業において、まず音楽を聴いて強弱から生徒それぞれが自己のイメージをもち、その上で歌詞の意味を知り、音楽の要素の働きと歌詞の内容との関係について学んだ。音楽と歌詞の意味すなわち文化との関係を理解し、生徒はこれまでの体験と結びつけることができた。

また、他の生徒との対話を通して互いの考えを理解し合ったり、互いに評価し合ったりすることにより、「主体的・対話的で深い学び」に向かう様相が見られた。このような学びを実現するためには、生徒の思考を広げられるようなワークシートの活用が効果的であったと考える。

２．２　今後の課題

今回の授業実践では、音楽的思考を働かせることを重視したため、生徒がワークシートに記入する時間を多く設けた。そのため、歌唱に費やす時間を十分に取れなかった。

生徒がもったイメージや音楽表現の工夫を歌唱表現につなげていくための時間をしっかりと確保する必要があると考えた。

今後の課題としては、知識・技能の習得と、思考力、判断力、表現力の育成とをバランス良く関わらせた授業の改善が挙げられる。具体的には、生徒同士の対話をより深めるためにも、教師がグループの特徴をいち早くつかみ、グループそれぞれに的確なアドバイスができるようにしていきたい。